

「わたしは彼らを知っており彼らはわたしに従う」

復活節第4主日・C年 (16.4.17)

イエスは良い羊飼いわたしたちはその羊

早速、今日の福音ですが、ヨハネ福音の10章からとられております。ちなみにこの章は、全体にわたって羊飼いと羊のイメージを使ってイエスとわたしたちとが永遠のいのちによって密接に結ばれていることを、ていねいに説明しております。従って、今日の箇所を理解するためには、章全体の文脈にそって解釈しなければなりません。

まず、その舞台設定ですか、パレスティナ地方の牧畜生活が背景になっております。朝、羊飼いたちは、主人から任されている羊をその囲いから連れ出し、緑の牧草地で牧草を食べさせ、また、夕方には主人の囲いに連れ帰るというまさにのどかな牧歌的風景であります。

そこで、ヨハネがこの章で強調しているのは、羊たちは、羊飼いの声を知っているの、信頼して羊飼いについて行くということでもあります。

ですから、ヨハネは、この羊飼いと羊との信頼関係のイメージで、実は、イエスとわたしたちとの密接な関係を説明しているのであります。

したがって、まず、1節から6節の段落では、「羊の囲い」のたとえで、次のように羊飼いと羊の関係をみごとに描いております。

「門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。・・・羊はその声を知っているの、ついて行く。」

わたしたちが、イエスの声を知っているなら、当然イエスについて行くことができるというのです。

次に、7節から18節の段落では、イエスのご自分を、何と「良い羊飼い」というイメージで次のように感動的に宣言しております。

「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。・・・わたしは自分の羊を知っており、羊もまたわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。」(ヨハネ 10.11-16c)

この段落では、特に「良い羊飼いは羊のために命をすてる。」ことが強調されておりますが、わたしたちは、イエスが十字架上でご自分の命を、わたしたちの罪の贖いのためにささげられ、御父によって復活させられた救いの御業のクライマックスを、この復活節に50

日かけて祝い続けることができるのです。

また、この段落でも、「その羊もわたしの声を聞き分ける。」が、繰り返されており
ます。

そして、今日の朗読箇所
の段落で、神殿奉獻記念祭が行われる冬に神殿の境内でイエスを拒絶するユダヤ人に問い詰められる場面が展開されるのであります。

「イエスは、神殿の境内でソロモンの回廊を歩いておられた。すると、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。『いつまで、わたしたちの気をもませるのか。もし、メシアなら、はっきりそう言いなさい。』イエスは答えられた。『わたしが言ったが、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。わたしは彼らに永遠のいのちを与える。』」

特に今日の場面では、すでに最初の段落で言われた「羊はその声を聞き分ける。羊はその声を知っている
ので、ついて行く。」(3-4節)そして、次の段落でも繰り返された「その羊もわたしの声を聞き分ける。」(16節b)が、さらに強調されて、「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らは私に従う。」(27節b)と宣言されて
おります。

イエスの声を聞き分け、従う

ですから、わたしたちがイエスを知っている
ので、その声を聞き分けることができるだけでなく、イエスに聞き従うという新しい生き方を実践できることにほかなりません。

したがって、まず、イエスを知ることが肝心なのですが、実は、第2段落でイエスが、すでに「わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っていると同じである。」と強調
なっておられます。そこで、今日の箇所
で最後に宣言されておられる「わたしと父は一つである。」からして、ここで言われている「知る」とは、まさに一体となる。つまり、堅く結ばれ、すべてにおいて一致することではないでしょうか。

つまり、イエスはいつもわたしたちと共にいてくださるので、わたしたち一人ひとりを十分に知っておられるのであります。

ですから、わたしたちが、イエスを知ることができるためには、しっかりイエスに繋がっていない
なければなりません。つまり、日々の生活においてイエスから離れて自分中心の行動に走らないためには、いつも共にいてくださるイエスの語り掛けに耳をそばだてていなければ
なりません。

しかも、イエスの声を聞き分けることは、イエスに従うことにほかなりません。そこ

で、すでにイエスに聞き従う基本的な生き方を、次のように教えておられます。

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。」(マルコ 8. 34b-35) ここで言われている「自分を捨てる」とは、まさに自己主張をやめて、徹底してイエスのおことばに聞き従うことではないでしょうか。ですから、「自分の命を救いたいと思う」ということも、結局、我を通そうとする頑固さではないでしょうか。したがって、イエスのため、また福音のために自分の命をもささげるなら、永遠の命にあずかることができるのではないのでしょうか。

最後に、イエスが、弟子たちと別れる際に最後の晩餐の席上、あたかも遺言のように語られた説教のさわりのおことばを振り返って見ましょう。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かな実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。・・・あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選らんだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」(ヨハネ 15. 5-17)

今週もまた、派遣されるそれぞれの場で、豊かな愛の実をもたらすことができるよう共に祈りましょう。